

イラクが運転する車の助手席で
JICAがナビゲートする。
そんなふうにはイラク支援に取り組みたい。



JICAイラク事務所
坂本 威午
SAKAMOTO Takema

大学卒業後、1989年に海外経済協力基金(OECF:当時。現在JICAと統合)に就職。中国・韓国・モンゴル向けの円借款業務、北京事務所、総務部、広報室、在イラク日本国大使館出向などを経て、2011年10月から現職。

今年8月に首都バグダッドに開設されたJICAイラク事務所にもまもなく赴任予定の坂本威午さん。「復興からの国づくり」に貢献すべく、イラクの人々と寄り添いながら奮闘している。

「三 国志」が好きで関心を持った中国に初めて行ったのは大学生の時。底知れぬパワーに圧倒されました。その時代はまだまだ交通秩序もなく衛生環境も悪かったのですが、国際水準の思考・行動様式を取り入れれば発展できる、そんな「国づくり」を手伝いたいと思いました。そして偶然手にしたのが、日本の政府開発援助(ODA)の円借款業務を当時行っていた海外経済協力基金(OECF)の就職案内。「途上国で国づくりのダイナミズムにかかわれる。ここで働こう」。そう即断しました。

就職後は、まず中国・韓国を担当。円借款は事業規模が大きく、かつ返済が求められる事業なので、借り手側にとって慎重な検討、覚悟が必要になります。現地の人たちと「この国を良くしていくんだ」という思いを一層強く共有した上で仕事ができたと考えています。日本の支援でできた中国初の先進的な下水処理場を全国各地の関係者が熱心に視察しているのを見たときは、こうした国家事業を、シヨウウィンドーモデルとし、波及効果を生み出すことで国全体の変革につなげていく、これがまさに国づくりなのだ、やりがいを感じました。

さまざまな国や機関が援助を行う中で、JICAの強みは何なのか。それは、日本人ならではの真摯さと誠実さです。いかに相手側の立場に立つて物事を考え、途上国のオー

ナーシップ(主体性)を引き出しながらパートナーシップ(協力関係)を築いていくか。私のモットーはどんな時も直接顔を合わせて話をする。自分としては、口うるさいけど親切なプロの家庭教師を目指しています。

また、相手国から求められるのは、日本の発展の歴史や日本が支援した国々での経験や教訓。「日本の『全国総合開発計画』で得られた教訓は何か」、「われわれは発電増強を計画しているが、JICAの経験を踏まえてアドバイスがほしい」など具体的な質問が飛んできます。私は官房部門の勤務も長かったので、JICAが世界各国でどんな協力をしてきたのか、それらがどのように評価・批判されてきたかを学ぶ機会が多く、ラッキーでした。

2004年からの約2年間は、イラクを含む中東を担当。昨年10月にはイラクの首都バグダッドの日本大使館に向かい、JICAの開発専門性の高い業務と、現地で体感したイラクの開発課題や取り組みを融合させる良い経験を得ました。

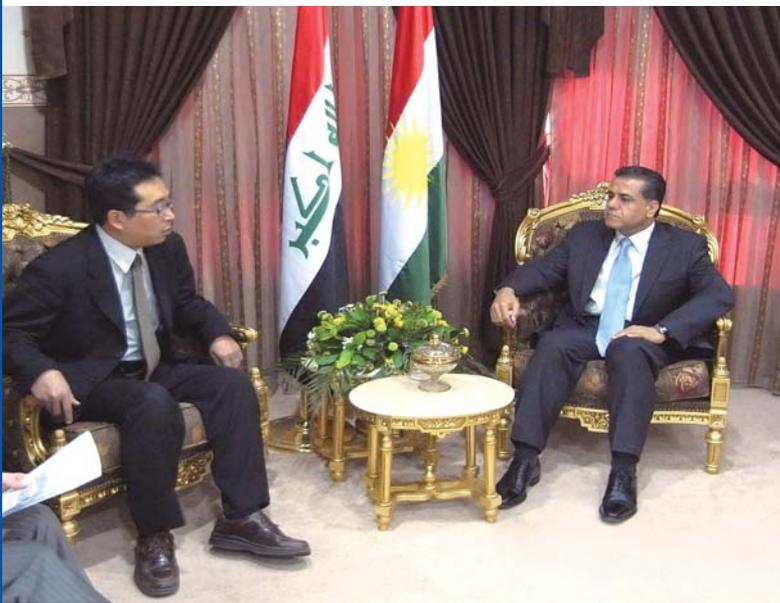
JICAは円借款や技術協力などを組み合わせた積極的にイラクを支援してきましたが、治安への懸念もあり、私が中東を担当していた04年ごろは東京や隣国ヨルダンからの遠隔業務を余儀なくされました。まさに「隔靴搔痒」でした。しかしその後、09年3月に治安が比較的安定している北部のエルビルに拠

点を設け、さらに今年8月には首都に事務所を開設。とはいえ、事業現場や政府機関には気軽に行けず、「靴」は脱げたものの、まだ「靴下」を履いている状態。かゆいところに手が届かないもどかしさを感じますが、「靴」を脱いだことで得られた意義や効果は計り知れません。



万が一に備え、防弾チョッキとヘルメットは必須アイテム。「JICA職員が危険な目に遭えば、すべての協力、日本・イラク間の交流がストップしかねない。危機管理対策も大切な業務の一つです」

その第一歩として、他ドナーとの密接な情報交換を通じ、イラク側のニーズの多層的な把握に努めています。また、イラク側の関係者が一堂に会する定期会合を開き、大臣クラスのアニシアチブも引き出して問題の具体的な解決策を決めています。イラクは資源も豊富で、市場のポテンシャルも大きい、将来有望な国。そのイラクに対してJICAに何ができるかを考えることが大切。JICAの支援によりビジネス環境が整備されれば、日本をはじめ海外の民間企業も進出でき、持続的な発展につながるはず。単に「仕事だから」と流すのではない。熱い思いと論理的思考を持ち、オープンマインドで現地の人々と共に前に進んでいきたいと思っています。



クルド自治政府のムスタファー外務庁長官と開発課題や民間分野活性化策について話し合う坂本さん(左)